

## 下郷コレクションの瓦経片

加藤 俊吾

要旨 大阪歴史博物館に収蔵されている下郷コレクションは、かつて滋賀県長浜市に所在した財団法人下郷共済会が所蔵したものである。当コレクションに含まれる瓦経は出土地などの情報をもたず、これまでに公表されたこともないため、ほとんど知られることがなかった。本稿ではこれら瓦経を新例として報告するべく、校合およびその内容を検討を行った。

その結果、これらが伊勢市小町塚瓦経と一連のものである可能性がきわめて高いことがわかった。そのなかには既出資料によって補完される書写内容をもつ個体も存在し、瓦経製作を考える上で興味深い資料といえよう。さらに、経典以外の書写内容をもつ個体が含まれていることもあらたに判明した。その内容は天台宗の僧・光宗（一二七六―一三五〇）による『深嵐拾葉集』の一部と合致する。経典以外の内容をもつ瓦経をどのように捉えるべきか、今後に残された課題として注目される。

### 一、はじめに

大阪歴史博物館（以下、当館とする）に収蔵されている下郷コレクションは、かつて滋賀県長浜市に所在した財団法人下郷共済会が所蔵したもので、鍾秀館と名づけられた私設博物館に展示されていたことがわかってい

つで、公表されたこともないため、これまでの瓦経研究においてまったく触れられることがなかったものである。このたび、当館保管瓦経を調査する機会があり、当コレクションに含まれる瓦経についても検討した結果、ほとんどが三重県伊勢市小町塚瓦経と判断することができた。加えて、そのほかにもいくつかの興味深い点が確認されたため、新たな瓦経資料例として報告するとともに瓦経研究における本資料群の位置づけを行う。

## 二、これまでの瓦経研究と当館保管の瓦経資料

瓦経とは経文が刻まれた粘土板を焼成したものである。埋納された状態で発見されており、経塚埋納遺物の一種といえる。現存する瓦経資料の多くは伝世品で、しかも破片の状態であることが多い。記された願文・奥書などから判断する限り、鳥取県倉吉市大日寺で発見された瓦経が最も古く、延久三年（一〇七二）とされている。

また、小町塚瓦経は相当数の現品または拓本が各地で収蔵されていることがわかっている。瓦経の発見が江戸時代（天明年間）まで遡り、出土した瓦経は京都や江戸などの各地に持ち出されていた「小玉二〇一二、七六頁」ことも、背景にあったと見られる。

これまでの瓦経研究を振り返ったとき、注目されるのは次の二点である。ひとつは、瓦経の埋納は末世における経典保存が目的のではなく、極楽往生のための「作善業」であったという指摘であり、もうひとつは、小町塚瓦経において、瓦経の複数部製作とその混入という現象が見えてきたことである。石田茂作により瓦経研究が本格化した当初から瓦経塚造営の意義が問われていたが「石田一九五八」、岡山県倉敷市安養寺瓦経の発見・発掘を契機に、作善に基づく造営という視点がより強く意識されるに至った「鎌木一九六三」。そしてこれを小町塚瓦経の検討から実証的に示したのが和田年弥や村木二郎であった「和田一九九〇、村木二〇〇二」。特に村木はそれまでに知られていた小町塚瓦経および近接する菩提山瓦経の伝世資料を悉皆的に取り上げ、検討を行った。その結果、小町塚瓦経のほぼすべてにおいて重複して製作された可能性を指摘、その理由として両瓦経が同時に製作されたためとの見解を示した。さらにその結果を、同瓦経が

「作ることに意義を見出していた」ためと評価した「村木二〇〇二」。このように、個々の瓦経の校合と復原に基づいた瓦経塚造営の意義付けは、それまでの先行研究における蓄積を開花させたものとして大きな意味をもち、かつそれ以降の小町塚瓦経研究上の指標になったといえる。もちろん本稿もこれに拠るところが大きい。

ところで、当館には本稿が対象とした資料以外にも瓦経が保管されている。そのいくつかについては、かつて網干善教によって検討が行われている「網干一九七九・一九八六」。館蔵品では現在一六点があり、そのうちの五点（収蔵番号・考六二五九〜六二六二）は当館で長尾コレクションと称される個人収集品である「網干一九八六」。このほか寄託品が二点あり、こちらも個人によって収集されたようである「網干一九七九」。これら七点に、今回の検討対象資料一点と、さらに未報告分である一点の館蔵品を加えた合計二十九点が、当館保管瓦経の総数となる<sup>1)</sup>。

また、これまでに報告された当館保管瓦経の書写経典には、『大般若波羅蜜多経』一点（考六二六〇）、『妙法蓮華経』（以下、法華経と略記）一点（考六二五九）、『大毘盧遮那成佛神變加持経』（以下、大日経と略記）一点（考六二六一）、『蘇悉地羯囉経』（以下、蘇悉地経と略記）三点（考六二六一―二、寄託品二点）がある<sup>2)</sup>とされている。なお、考六二六一―一は小町塚瓦経と見られており「網干一九八六・村木二〇〇二」、これと同一個体（ただし別箇所）の拓本が現在国立歴史民俗博物館に所蔵されている「村木二〇〇二、三五―三六頁」。

### 三、下郷コレクション瓦経の内容

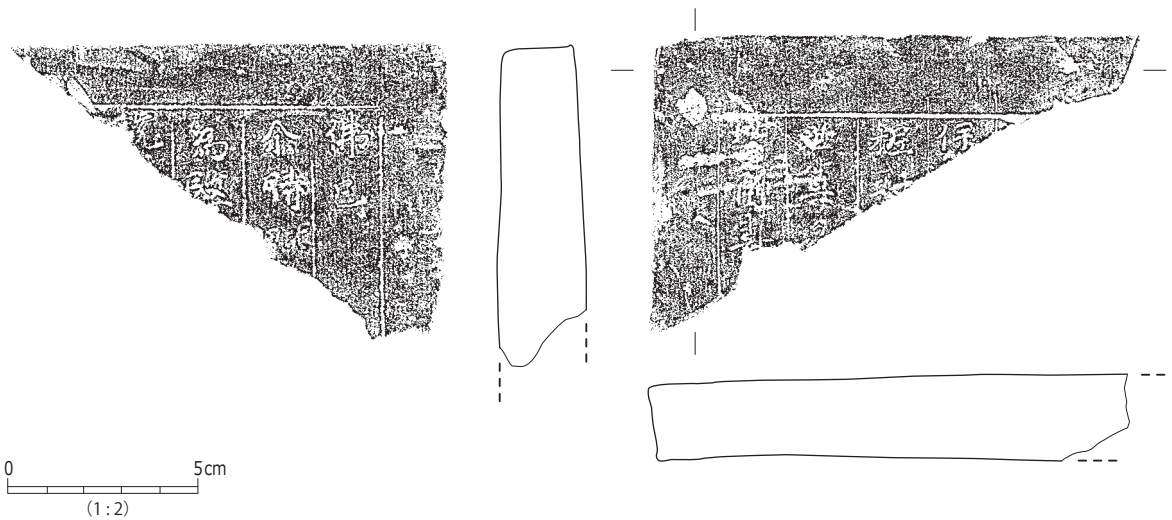
これまでに知られている出土瓦経との外観上の比較（筆跡、胎土、罫線、文字配置など）から、まずは小町塚瓦経との類似性が見て取れた。その想定の下で各資料を復元し先行研究の成果と照合した結果、概ね小町塚瓦経と判断できることがわかった。以下、その詳細について述べる。

#### (一) 法華経

一点確認できた。資料番号は考五七八六一〇である（第1図・写真1）。破片で、残存する法量は幅一二九mm、高さ八九mm、厚さ二四mm（いずれも最大、以下同）を測る。焼成は良好。胎土も緻密だが、直径一二mmほどの礫の混入が一箇所確認された。色調は灰褐色を呈する。上辺小口面の角には粘土のメクレが弱く残り、これを掻き取るように面取りしている。残存する文字を以下に示す<sup>(3)</sup>。

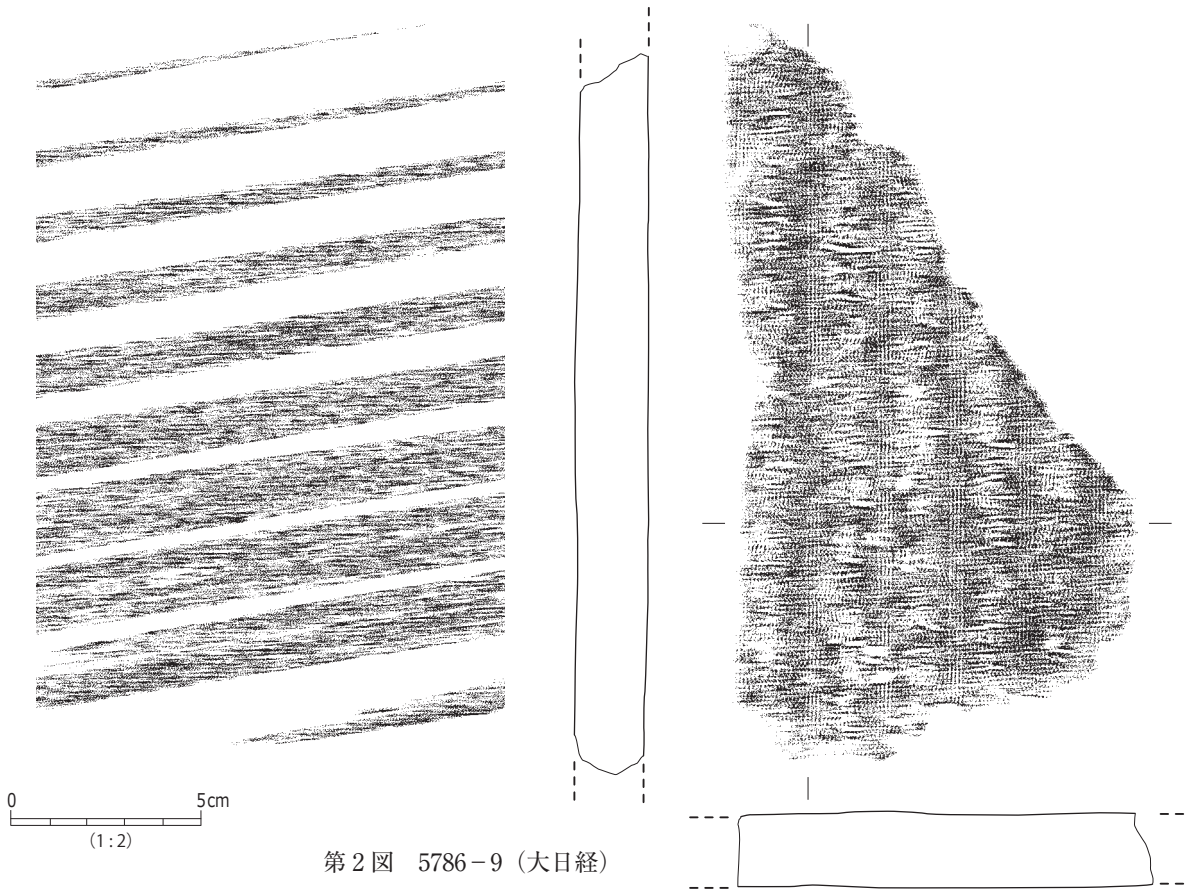
《X面》	《Y面》
伊……………	佛已……………
梶 <sup>二+</sup> ……………	尔時毗……………
世尊□……………	為愍……………
皆隨喜……………	說……………

この判読された内容を『大正新脩大藏経』（以下、大正大藏経と略記<sup>(4)</sup>）によって校合した結果、法華経卷第八の「陀羅尼品第二十六」であると判断した。その配置案を以下に示す<sup>(5)</sup>。



第1図 5786-10 (法華経)





第2図 5786-9 (大日経)

となり、大正大藏経をもとに校合した結果、大日経巻五の「入秘密漫荼羅位品第十三」から「秘密八印品第十四」に該当すると判断した。配置案を以下に示す。

- 1 心漫荼羅秘密主彼身地即是法界自性眞
- 2 言密印加持而加持之以本性清淨故羯磨
- 3 金剛所護持故淨除一切<sup>團</sup>我人衆生壽
- 4 者意生儒童造立者等<sup>株</sup>机過患方壇四門
- 5 西向通達周旋界道<sup>内</sup>現意生八葉大蓮華
- 6 王抽莖敷<sup>蕊</sup>綵絢端妙其中如來一切世間
- 7 最<sup>尊</sup>特身超越身語意地至於心地悉<sup>速</sup>得
- 8 殊<sup>勝</sup>悅意之果於彼東方寶幢如來南方<sup>開</sup>

……<sup>尊</sup>□特身超越身語意地至於心地悉速□  
 ……□悅意之果於彼東方寶幢如來南方□  
 ……

《Y面》

□  
 ……<sup>時</sup>□毗盧遮那<sup>尊</sup>復觀諸大衆會□  
 ……<sup>主</sup>□言佛子有秘密八印<sup>爲</sup>□<sup>解</sup>□  
 ……□所同自眞言道以爲標□  
 ……<sup>相</sup>□應若依法教於<sup>如</sup>□  
 ……<sup>如</sup>□是知自身住<sup>如</sup>□  
 ……□住而得□

- 9 敷華王如來北方鼓音如來西方無量壽如來東南方普賢菩薩東北方觀自在菩薩西南方妙吉祥童子西北方慈氏菩薩一切蕊中佛菩薩母六波羅蜜三昧眷屬而自莊嚴
- 12 下列持明諸忿怒衆持金剛主菩薩以爲其莖處于無盡大海一切地居天等其數無量而環繞之爾時行者爲成三昧耶故應以意
- 15 生香華燈明塗香種種餽膳一切皆以獻之
- 1 優陀那曰
- 2 眞言者誠諦 圖畫漫荼羅 自身爲大我 囉字淨諸垢
- 3 安住瑜伽座 尋念諸如來 頂授諸弟子 阿字大空點
- 4 智者傳妙花 令散於自身 爲說內所見 行人宗奉處
- 5 此最上壇故 應與三昧耶
- 6 祕密八印品第十四
- 7 爾時毘盧遮那世尊復觀諸大衆會 執金剛祕密 言佛子有祕密八印最爲 祕密聖
- 8 天之位威 神所同 自眞言道以爲標 圖具
- 9 漫荼羅如本尊 相應若依法教於眞言門修
- 11 菩薩行諸菩薩應 如是知自身住本尊形堅
- 12 固不動知本尊已如本 尊住而得 悉地云何
- 13 八印謂以智慧三昧手作空心合掌而散風
- 14 輪地輪如放光焰是世尊本威德生印其漫

表面では、五行目の「道」を欠く一方で、七行目に「悉」が追加されていることがわかった。裏面では、書写されていたと見られる五字一句の偈

文を、先行研究を参照して一行四句の規格に従った。裏面九〜一〇行目の残存文字の並びから推察するに、この前後付近において瓦経での脱字があった可能性が窺える。また、經典自体の基本規格として想定した一七字×一五行で大日経を割り付けていくと、巻五の一三枚目にほぼ該当した。「村木二〇〇二」の一覧表からは当瓦経に後続する箇所を東観音寺所蔵品（一四枚目）「豊橋市美術館二〇〇〇」が書写していることがわかるが、写真を見る限りでは経文は連続しないようである。

配置案の規格が正しければ、原形は幅三一五mm、高さ二二五mmと復原され、小町塚瓦経の法量に概ね合致するが、これまでの小町塚瓦経よりも幅の数値が大きく、反対に高さが低いことなど、やや注意が必要である。

（三）金剛頂一切如來眞実撰大乘現証大教王経（金剛頂経）

一点確認できた。資料番号は考五七八六―八である（第3図・写真3）。残存する法量は幅一三一mm、高さ一三八mm、厚さ二二mmである。焼成はやや軟質だが概ね良好。胎土は緻密である。色調は暗灰色を呈する。

残存する文字は、

《X面》

.....  
 ..... 金剛歡喜 善哉聲皆喜 由.....  
 ..... 金剛日 如佛得圓光 持金.....  
 ..... 共諸佛等笑 持法.....  
 ..... 得惠救者 持□.....  
 ..... 金剛語成就 遍.....



9	則能轉法輪	由金剛語故	金剛語成就	遍持業金剛
10	等同金剛業	堅作金剛護	成身如金剛	金剛牙勝印
11	能摧諸惡魔	堅結金剛拳	順因諸契印	因戲得喜悅
12	由鬘得莊嚴	由語語威肅	得供由舞故	焚香滋澤世
13	由花色端嚴	由燈世清淨	由香獲妙香	金剛鉤召得
14	金剛索得入	金剛鎖能縛	金剛鈴遍入	我今說法印
15	嚩日羅惹南通佛		能作堅固金剛界	
1	次復我今當遍說	法印勝契如本儀		
2	誦三昧耶薩怛鏤 <small>二合</small>	一切印契爲主宰		
3	誦阿娜耶薩縛已	即能鉤召一切佛		
4	阿斛引蘇佉稱誦已	染愛一切諸佛等		
5	姿度姿度是語已	皆以善哉令歡喜		
6	蘇摩訶怛鏤 <small>二合</small> 誦已	則獲一切佛灌頂		
7	嚩褒爾度 <small>二合</small> 多語已	則獲正法威德光		
8	誦遏他鉢羅 <small>二合</small> 波底 <small>反丁口</small>	能滿一切殊勝願		
9	呵呵吽壑作是笑	獲得如來微妙笑		
10	薩嚩迦哩是誦已	能淨非法皆清淨		
11	藕佉掣 <small>反之曳</small> 那誦持已	能斷一切苦受業		
12	勃馱胃地是言已	於曼荼羅爲主宰		
13	鉢羅底攝娜誦已	共預諸佛談語論		
14	蘇嚩始怛鏤 <small>二合</small> 誦已	遍行一切而自在		
15	爾 <small>反尼逸</small> 婆 <small>去</small> 也怛鏤 <small>二合</small> 語已			

両面ともに偈文の書写であることから、一行分の配置を、表面は五字一句の四句とし、表面の空きスペースと裏面の空白との対比から裏面は七

字一句の二句配置で復原した。句毎の文字揃えに対する意識が強かったようだ。また、金剛頂経が見つかった瓦経塚は小町塚・大日寺・男山で、前二者の場合、一五行配置となっていることから、おそらくこの瓦経も一五行だった可能性が高い。なお、直前の経文を書写した瓦経が関西大学の所蔵品にあり「網千一九八二、二二六頁」、経文のつながりも整合する。想定配置案で割り付けた場合、九枚目に相当する。

復原された原形は、幅が三〇〇mm、高さが二六二mmとなり、小町塚瓦経の法量にほぼ適合する。

#### (四) 蘇悉地経

合計四点確認できた。おそらく、すべて大正大蔵経で「別本二」とされる宝寿院本に適合すると思われる。以下、個々の資料について該当する経典の出現順に述べていく。

##### ① 資料番号 考五七八六―三(第4図・写真4)

残存法量は幅二〇二mm、高さ八五mm、厚さ二〇mmを測る。焼成は、残存する上辺側が堅緻(一部ガラス質化)で、下方にいくにつれてやや軟質となる。胎土は緻密である。色調は灰褐色く青灰色を呈し、一部白色に近い箇所も認められる。粘土板切り離し後の調整工程として、上辺小口面と、裏面と判断された側の欄外上部分のへこみが認められるほか、上辺小口の角では粘土のメクレと面取が確認できる。さらに、残存する上方片隅が、上辺および側辺からそれぞれ反り上がったように形成されている点は特徴的である。

残存する文字は、



- 9 願有所指授。唯共伴語若欲成就最勝事故  
 10 更許一伴展轉合語不得參差其伴所食與  
 11 行者同行者所食如依法制具如是者堪爲  
 12 寂上勝事同伴第三同伴福德亦然如前所說  
 13 蘇悉地羯羅經擇處品第五  
 14 復次演說持誦眞言成就處者任何方地速  
 15 得成就佛所得道降四魔處最爲勝上速得
- 1 成就尼連禪河於沂岸處無諸難故其地方  
 2 所速得悉地縱有衆魔不能爲障所求之事  
 3 無不悉地如是之處速得成就或於佛所轉  
 4 法輪處或拘尸那城佛涅槃處或迦毘羅城  
 5 佛所生處如上四處最爲上勝無諸障礙三種  
 6 悉地決定得成又於諸佛所說勝處復有  
 7 菩薩所說勝處佛八大塔或有名山多諸林  
 8 木復多花菓泉水交流如是之處說爲勝處  
 9 或有蘭若多諸花菓渠水交流人所愛樂如  
 10 是之處說爲勝處復有蘭若多諸麋鹿無人  
 11 採捕復無熊虎狼等獸如是之處說爲勝  
 12 處或無大寒復無大熱其處宜人心所樂者  
 13 如是之處說爲勝處或於山傍或山峯頂爲  
 14 獨高臺或於山腹復有流水如是之處說爲  
 15 勝處復有勝處青草遍地多諸樹花中有其

このように、基本はおそらく一行一七字詰で書写されたと思われるが、一部で一六字・一八字の箇所があったようだ。行数は片面一五行と思われる

る。この配置案をもとに復原すると、幅二九五mm、高さ二五七mmとなり、小町塚瓦経の法量と矛盾しない範囲に収まり、かつ同巻の八枚目に割り付けられた。当資料の前後にはそれぞれ国立歴史民俗博物館所蔵宇野拓本一三〇「村木二〇〇二、五四頁」と京都国立博物館所蔵資料「難波田一九八二、二二八頁」が存在し、矛盾なく連続するとみられる。また前者は小町塚瓦経とみなされることから、当資料も小町塚瓦経の可能性が高い。

② 資料番号 考五七八六一七（第5図・写真5）

残存法量は幅一二〇mm、高さ一九三mm、厚さ二二mmを測る。焼成は良好で、特に上辺付近では薄くガラス質化している部分も見られるほど堅緻である。胎土は緻密だが、少量の砂粒が観察できる。上辺小口の両面端部では、メクレと面取り、さらに上辺小口面の凹みも認められる。また、残存する側辺がやや外反する点は上述①に似る。

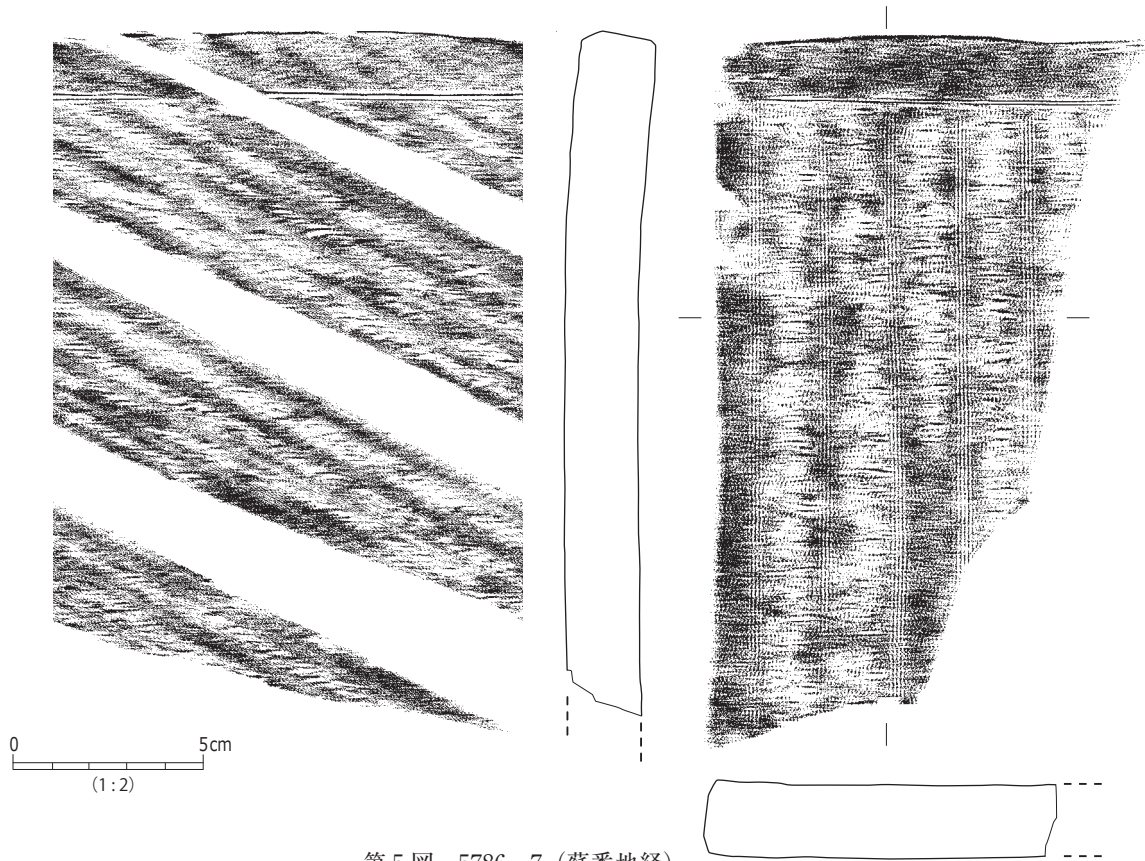
残存する文字は、

《X面》

.....  
 唵<sup>同上</sup>賀 .....  
 此真言二手掬水真言 .....  
 度次結頂髮真言曰 .....  
 唵<sup>同上</sup>素<sup>反種古</sup>悉地迦履莎<sup>合去二縛</sup> .....  
 此真言真言髮三遍當頂作髻 .....

《Y面》

作拳<sup>三</sup> ◆ 大拇指屈頭指押大指頭 .....  
 真言三遍置印頂上佛部結髮 .....



第5図 5786-7 (蘇悉地経)

となり、校合の結果、蘇悉地経（別本二）卷上「持真言法品第六」に相当すると判断した。配置案を以下に示す。

- 1 庵一同上阿上密栗底反丁二禮歌曩歌曩三虎二合併
  - 2 拈四
  - 3 此真言誦之七遍辟諸毘那夜迦即澡浴之
  - 4 沐浴真言曰
  - 5 庵一同上阿上密栗底二同上虎二合併拈三
  - 6 此真言誦七遍隨意澡浴洗浴之時勿諛談
  - 7 話心須持念沐浴心真言沐浴心真言曰
  - 8 庵一同上囉可理理二虎二合併拈三
  - 9 此真言誦之乃至浴竟次掬水自灌頂上自
  - 10 灌頂真言曰
  - 11 庵一同上賀佉里里二虎二合併拈三
  - 12 此真言二手掬水真言三遍自灌其頂如是三
  - 13 度次結頂髮真言曰
  - 14 庵一同上素反蘇古悉地迦囉二莎囉合去二訶三
  - 15 此真言真言髮三遍當頂作髻若是比丘右手
  - 1 作拳舒大指屈頭指押大指頭上令頭指圓曲
  - 2 真言三遍置印頂上佛部結髮真言曰
- 庵一同上尸祇 尸契二莎合去二縛訶……………  
 蓮花部結髮真言曰  
 庵一同上 □戸カ □……………

- 3 唵<sup>同上</sup>尸祇 尸契<sup>二</sup>莎囀<sup>合去二</sup>訶<sup>三</sup>
- 4 蓮華部結髮眞言曰
- 5 唵<sup>同上</sup>□契<sup>二</sup>莎囀<sup>合去二</sup>訶<sup>三</sup>
- 6 金剛部結髮眞言曰
- 7 唵<sup>同上</sup>尸佉去寫<sup>二</sup>莎囀<sup>合去二</sup>訶<sup>三</sup>
- 8 次應洗手三度漱口浴本尊主佛部漱口
- 9 飲水灑淨眞言曰
- 10 唵<sup>同上</sup>摩訶<sup>二</sup>入嚩羅訶
- 11 蓮華部漱口飲水灑淨眞言曰
- 12 唵<sup>同上</sup>觀<sup>下知難反</sup>觀囉<sup>二</sup>矩嚕矩嚕<sup>三</sup>莎囀<sup>合去二</sup>訶<sup>四</sup>
- 13 金剛部漱口飲水灑淨眞言曰
- 14 唵<sup>同上</sup>入嚩理多<sup>二</sup>嚩日哩拏訶<sup>三</sup>句
- 15 作漱口飲水灑淨己面向本尊所居之方

当個体の書写内容はほぼ真言のみからなるため定型的な規格に当てはめることは難しいが、表面の最終行や裏面の一〜三行目の状況を見る限り一行が一六〜一八字詰であったと考えられることから、ここでは一七字で復原を試みた。なお、裏面一行目は一九文字あり、一四字から一九字目の間で脱字があったと推測される。また行数は、上述①（考五七八六―三）との共通性から連続する瓦経（同一本）とみなし、片面あたりの行数を一五行と想定しておく。この配置案にもとづいて原形を復原すると、幅三〇六mm、高さ二五七mmとなる。この配置案で同巻を割り付けていった場合、一二枚目に相当する<sup>(7)</sup>。

③資料番号 考五七八六―二（第6図・写真6・7）

残存法量は幅一九二mm、高さ一三二mm、厚さ二〇mmを測る。焼成は良好

で、上辺小口付近が特に堅緻である。これに対して下部ではやや軟質となる。胎土は緻密。色調は、小口面が暗灰褐色で、刻字面では淡灰褐色〜青灰色を呈する。上辺小口では両面側の角が面取りされ、裏面側の上部付近（欄外部分）はややへこむ。  
残存文字は、

《X面》

- ……………
- 或但 ……………
- 置於内 ……………
- 之次用白芥 ……………
- 其物牛黄塗故便 ……………
- 護以花供養便成光顯 ……………
- 不得廢闕於本尊前置 ……………
- ：□釋之難於東南 ……………
- ：□日晝夜應知□ ……………
- ：□謂死屍形□ ……………

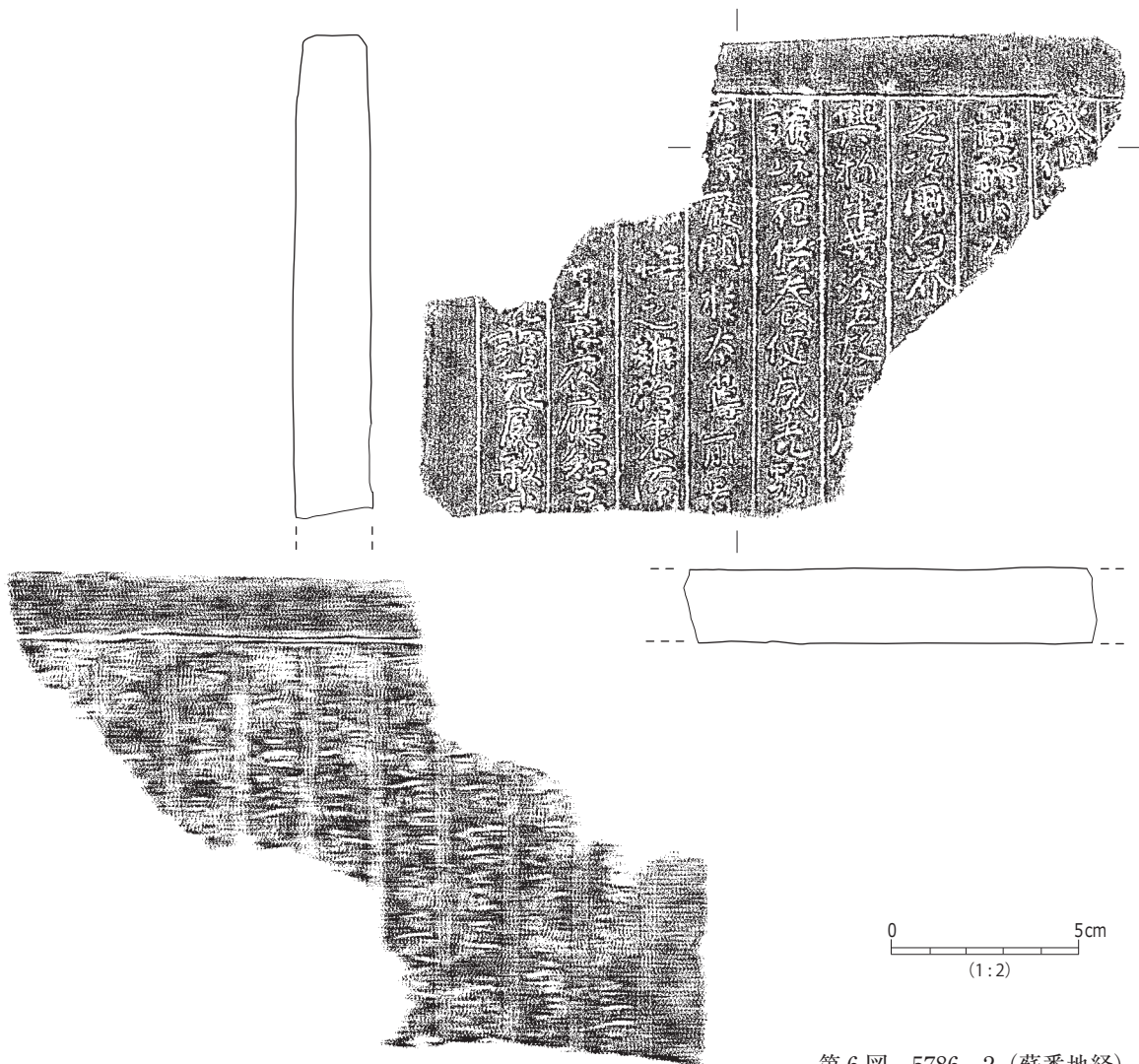
《Y面》

- …………… 悉剎鼻 ……………
- …………… 應知即<sup>(摩訶)</sup>摩之 ……………
- …………… □雨其屎<sup>(屎)</sup>穢 ……………
- …………… 可怖畏應知即是□□ ……………
- …………… 難現謂雨雷 ……………
- …………… 難於西北方 ……………
- …………… 即是風神 ……………

又及□ .....  
難 .....  
.....

と判読できた。この内容を大正大藏経で確認したところ、蘇悉地経（高麗本）巻下の「補闕少法品第三十六」と、同（別本二）巻中の「補闕少法品第十五」に該当箇所が見つかった。しかし、いずれかを判断できるような決定的な差がなく、書写文字の照合から底本を特定することは難しい。したがって、この瓦経については、これまでの蘇悉地経瓦経の校合が主に別本二で行われていること、当館所蔵のほかの資料が別本二によるものであることなどから、ひとまず別本二を採用して配置案を検討する<sup>(8)</sup>。

ところで、書写内容を校合した際に、当館所蔵瓦経では経典の一部が一二行にわたって脱漏していることがわかった（下掲配置案の点線囲み部分）。そしてその部分を書写した瓦経の存在が網干善教と村木二郎氏によって報告されていた<sup>(9)</sup>。その結果をふまえて、以下に復原案を示す<sup>(10)</sup>。なお、配置は一行が一六字一八字と幅があるものの概ね一七字を基本とし、行数については、前後に行数を確定できる類例が見当たらなかったため今のところ不明とするが、ここでは仮に一五行で復原した。



第6図 5786-2（蘇悉地経）

1 過到已頂禮諸尊及以遍觀各各以本眞言  
 2 而奉闕伽或以部心眞言奉獻所請眞言主  
 3 當以明王眞言請召所請明主當以明妃請  
 4 召已視本印及誦本眞言明等或但都視一  
 5 印誦其眞言及明若如是作速得悉地其成  
 6 〔就〕物有置闕伽器中或置瓶上或掬合手内  
 7 或但心念或置囀囉二合弭迦器或置葉上所  
 8 置於内本尊之前所成諸器皆以牛黃塗  
 9 之次用白芥子作護次持誦摩辣底花供養  
 10 其物牛黃塗故便成禁住用其芥子便成作  
 11 護以花供養便成光顯此三種法次第應作  
 12 不得廢闕於本尊前置成就物於中不得餘  
 物間隔成就之物用兩種法以爲作護一謂  
 手印二白芥子令成就物速有驗故數闕  
 伽花香等具及酪數應供養其助成就之人  
 護其物故常在其處如是安置供養物已然  
 後以手按之或以眼觀以其不散心徐徐持  
 誦中間數數光顯其物如是相續竟夜持  
 誦勿令間斷其夜三時以闕伽等次第供養  
 若須出外漱口令助成人替坐物前續次念誦  
 其持誦人有所廢忘其所助人皆須補闕持  
 誦之時若大難至助成之人應拒其難如不  
 能禁行者應自散白芥子以辟其難助成之  
 人持誦其物于時東方有是難現謂大雨雷  
 應知〔帝〕釋之難於東南方有是難現謂火色  
 大人或〔如〕日盡夜應知〔是〕是火天之難於其南

15 方有是難〔現〕謂死屍形〔固〕可怖畏高聲叫喚  
 1 手執大刀皆悉剝鼻手執髑髏盛人血飲頭  
 2 上火燃應知即是焰摩之難於西南方有是  
 3 難現謂雨其屎尿カ穢漫茶羅及種種形甚  
 4 可怖畏應知即是〔泥〕〔剛〕抵難於其西方有是  
 5 難現謂雷雨雷霹靂電等應知即是龍王之  
 6 難於西北方有是難現謂有大黑風起應知  
 7 即是風神之難於其北方有是難現謂大藥  
 8 又及〔囚〕藥又惱亂行者應知即是多聞天王  
 9 難於東北方有是難現謂象頭猪頭狗頭異  
 10 形各持火山應知即是伊舍那難於其上方  
 11 有諸天現具大威德應知即是上方天難下  
 12 方之難地動及裂應知即是阿脩羅難作上  
 13 成就方現斯難如是等難於中夜現凡上成  
 14 就難相還大中下成就准此應知於夜三時  
 15 是其上中下相與時相應即是成就時不相

このように、当瓦経の脱漏分が他の瓦経の内容と適合することがわかる  
 とともに、関西大学所蔵資料、東京国立博物館所蔵資料のいずれも裏面に  
 は経文がなく罫線または悉曇を記すのみであるという網干・村木の指摘か  
 ら推察するに、おそらくこの片面瓦経は脱漏に気づいた段階でその補完を  
 目的として製作されたものであったと考えられる。

なお、瓦経には表面一四行目に「夜」、裏面三行目に「尿」の文字がそ  
 れぞれ加えられているほか、裏面二行目の「是」が脱落している。

以上の配置案にもとづき原形法量を復原すると、幅三〇〇mm、高さ二四二mmとなる。また、配置案によって割り付けた場合、別本二の巻中一五枚目と考えられる<sup>(1)</sup>。

④資料番号 考五七八六一一 (第7図・写真8)

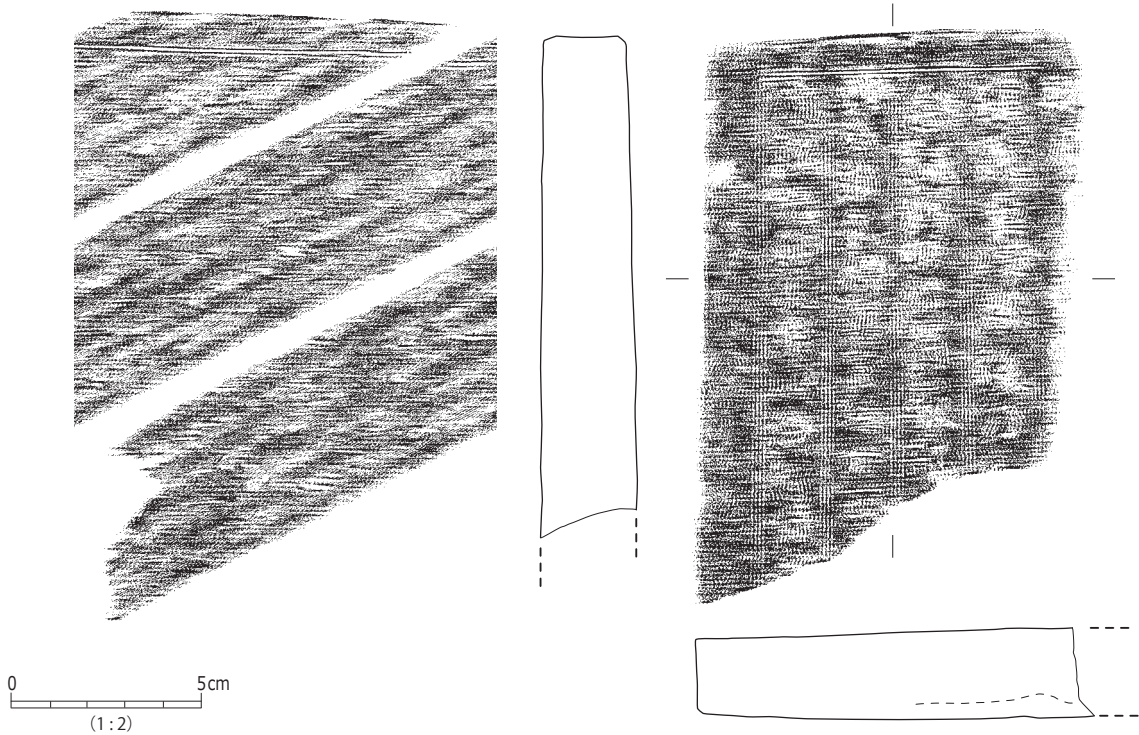
残存法量は幅一〇五mm、高さ一六〇mm、厚さ二三mmを測る。焼成は良好。上辺付近が薄くガラス質化するほど堅緻であるが、下部ではやや軟質となる。胎土は緻密だが、ケズリによる砂粒の移動痕が明瞭である。色調は一部で青灰色く白色だが、全体としては灰褐色を呈する。残存する二方向の縁辺端部(角)にはメクレと面取りが認められる。残存する文字は、

《X面》

.....  
 移處 □ □ □ □<sup>(部分)</sup> .....  
 作承事法然後乃 .....  
 念誦應作治罰取部 .....  
 時念誦本持真言經十万 .....  
 前説先作承事正念誦時 □ □<sup>(部分)</sup> .....

《Y面》

.....  
 言既知錯誤誠心懺過由於 .....  
 願尊捨過便申頂礼復須 .....  
 於穢處心放逸故誦本 .....  
 治罰至持誦處誦部 .....  
 一日不食次服五淨 □ .....  
 .....



第7図 5786-11 (蘇悉地經)

と判読した。これを校合した結果、蘇悉地経（別本二）巻下の「供養品第二」<sup>二十</sup>と判断した。配置案は、

- 1 就得成就時有何相貌所謂身輕病苦永除
- 2 增益勝慧心無所畏身威光現勇健增益夜
- 3 夢常見清淨實事心恒安泰於誦念時及作
- 4 事業不生疲倦身出奇香或行勇施欽敬尊
- 5 德於眞言主深生敬仰成就之時如現上事
- 6 當知即是成就相貌先承事了依於法則供
- 7 養本尊應加獻供及以護摩先承事法依數
- 8 既了次應須作悉地念誦復先求願於其夢
- 9 中而希警界作先承事法時所念誦處作悉
- 10 地念誦不應移處有諸難事而移去者至所
- 11 移處有諸難事而移去者至所住處復須先
- 12 作承事法則然後乃作悉地念誦若不依前
- 13 念誦應作治罰取部尊眞言誦一千遍或
- 14 時念誦本持眞言經十萬遍若離此者還如
- 15 前說先作承事正念誦時忽然錯誤誦餘眞
- 1 言既知錯誤誠心懺過由放逸故致斯錯誤
- 2 願尊捨過便申頂禮復須從始而念誦之忽
- 3 於穢處心放逸故誦本眞言便自覺已應須
- 4 治罰至持誦處誦部尊眞言七遍半月半月
- 5 一日不食次服五淨誦五淨眞言經百八遍
- 6 然後服之服此五淨半月之中所食穢惡之
- 7 食當得清淨眞言増力

- 8 佛部五淨眞言曰
- 9 娜謨幡伽<sup>上</sup> 嚩底<sup>反丁禮</sup> 烏瑟膩沙<sup>上</sup> 野<sup>三</sup> 弭
- 10 秬<sup>反輸律</sup> 睇<sup>三</sup> 弭囉制<sup>反而曳</sup> 始米<sup>四</sup> 扇底迦囉<sup>五</sup> 莎<sup>合二</sup>
- 11 嚩訶<sup>六</sup>
- 12 蓮華部五淨眞言 娜謨刺怛<sup>二</sup> 合 娜怛<sup>二</sup> 合 囉
- 13 耶野<sup>一</sup> 娜莫阿<sup>上</sup> 利野<sup>二</sup> 嚩路枳諦濕嚩囉野<sup>三</sup>
- 14 菩提薩埵野<sup>四</sup> 摩訶薩埵野<sup>五</sup> 摩訶迦嚩拏迦
- 15 野<sup>六</sup> 唵<sup>七</sup> 野<sup>同上</sup> 輸<sup>去</sup> 制<sup>反面八</sup> 莎<sup>合去二</sup> 嚩訶<sup>九</sup>

となり、裏面の四行目では一八字となっているもの、原則一七字詰で書写された可能性が高い。表面一一行目には一二字の追加（前行の重複）が見られる。いま仮に一七字×一五行でこの経典を割り付けていくと、計算上では当該瓦経はおおよそ一五枚目に相当する。この仮定した行数の妥当性を確認するためにも、同一四枚目とされている国立歴史民俗博物館所蔵宇野拓本一―三八・東京国立博物館所蔵品の組合わせ（以下、村木46と略称）「村木二〇〇二、五八―五九頁」をみておこう。

村木46の配置案をみると、一四枚目は通有の一七字×一五行と概ね合致しているものの、一部で一六字や一八字といった乱れがあったようだ。また復原された裏面最終行は「驗見者前所張像舍利塔等忽然搖動或光」となっている。したがって、村木46と当館所蔵瓦経最初行までの間には、經典上「焰出當知不久速得成」の九文字があることになり、両者は連続しないことがわかる。このズレは、一行あたり一六字または一七字のいずれを採用しても整合せず、より不規則な字詰めを採ったか、あるいは別の瓦経であるためかと解釈される。積極的な証拠はないがここではひとまず後者（重

複)であったとの理解に立っておきたい<sup>12)</sup>。したがって、当瓦経では通有の一行一七字×一五行による配置案を採用し、巻下の一五枚目前後としておく。なお原形法量は、配置案により幅三〇六mm、高さ二四四mmと復原された。

(五) その他

対校が可能な経文以外の刻字をもつ個体について、まとめて記載する。

① 悉曇瓦経 (第8〜10図・写真9〜11)

罫線内に悉曇を連続して充填するものが三点存在した(考五七八六一、四、五)。残存法量は一が幅二〇八mm、高さ七六mm、厚さ一八mm、四が幅四七mm、高さ八一mm、厚さ一九mm、五が幅六六mm、高さ九七mm、厚さ二〇mmを測る。焼成はやや軟質である。

書写された悉曇はすべて「𑖀(ウーン)」である。一は刻字が片面のみで、文字が無い側は面の形成意図が薄い。下部ではナデによる平滑化を行っている箇所もあるが、それ以外の部分では指頭圧痕がそのまま残されている。四も刻字は片面のみだが、一に比べて裏面が平滑化されている。五は明らかに平滑化が施されていて、「∴一百八十二∴」の刻字が確認できる。この数字が何を意味するのか現在のところ不明だが、京都国立博物館が所蔵する小町塚瓦経のなかにも「百八十七本」と刻字されている例があり「難波田一九八二、一三〇頁」、共通性を想起させる<sup>13)</sup>。なお、悉曇を書写した瓦経はこのほか国立歴史民俗博物館所蔵拓本でも類例として散見され「村木二〇〇二、六五頁」、二例とも小町塚瓦経と考えられている。

② 經典以外の内容 (第11図・写真12・13)

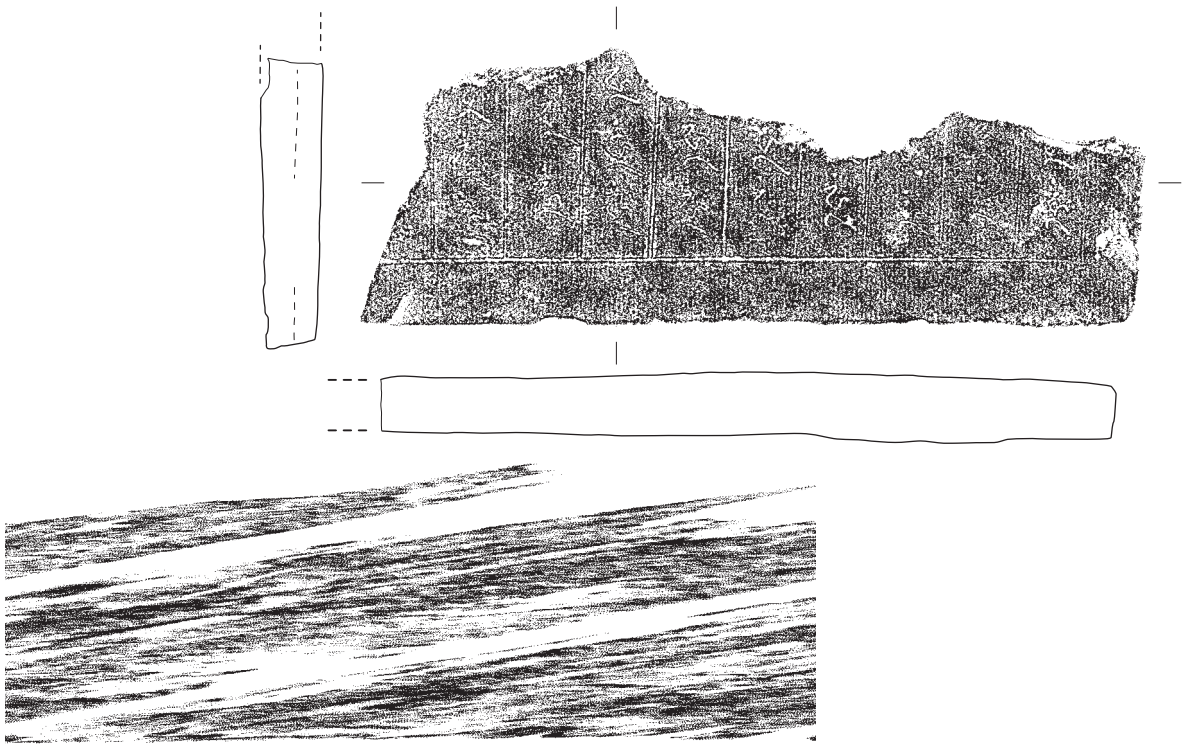
所蔵番号考五七八六一八は、大正大藏経との照合の中で、経文以外の内

容が書写されていることがわかった。書写内容については後述するとして、まずは残存状態の所見を述べると、法量は幅一七七mm、高さ一五二mm、厚さ二四mmを測り、焼成は良好、特に上辺付近ではうすくガラス質化するなどかなり堅緻な状態である。ただし下部へ向かうにつれてやや軟質になる。胎土は緻密だが、数箇所気泡が爆ぜた痕跡が残るほか、混和材と思われる砂礫が少量散見される。色調は暗灰色〜青灰色を呈する。形状は残存する側辺部がやや外反する。また、拓本図をみるとわかるように、両面には横方向の筋状の高まりが平行して残っており、粘土板を粘土塊から切り離す際の糸切り痕ないしはケズリ痕と見られる。おそらく板面調整が不十分だったと考えられ、そのため細かな条痕も多数確認できる。さらに、当資料の書写文字は上述してきた經典書写瓦経とは異なり、運筆が硬く、画線がやや直線的であることや、比較的細い工具で刻字(縦罫線含む)されているようにみえることも特徴として挙げられる。

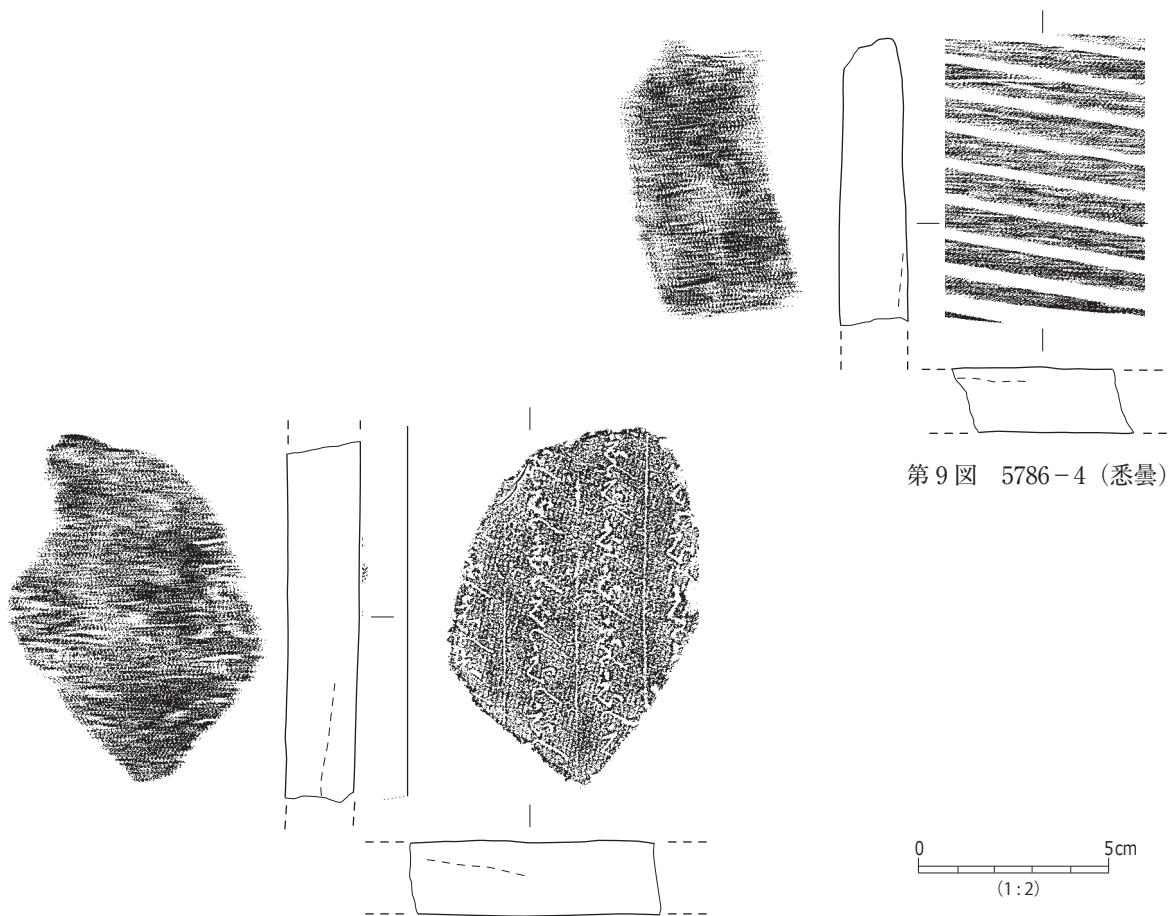
さて、その問題の書写内容を判読すると以下ようになった。

《X面》

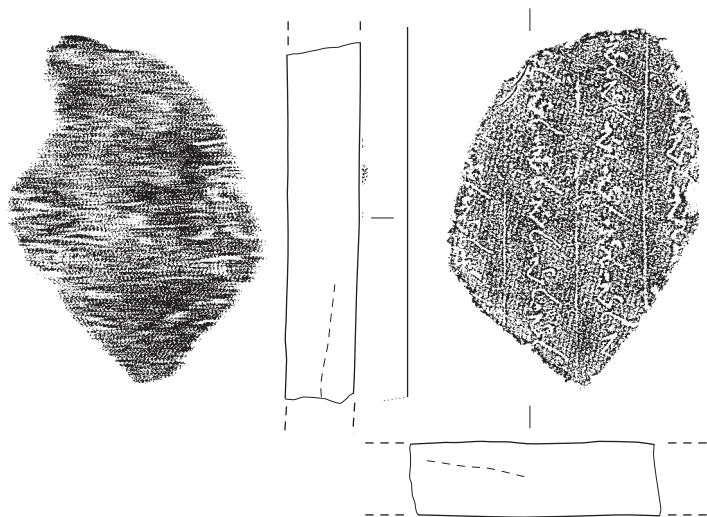
- A 本来来有普……………
- B 歴六趣四生不……………
- C 法於内心。中令觀日……………
- D 於惠泉顯得本覺……………
- E 身成佛自息成。大日□……………
- F ◆<sup>(非考)</sup> 蔽内證眷属現在……………
- G 故経云若有衆生已造□<sup>(非考)</sup>……………



第8図 5786-1 (悉曇)

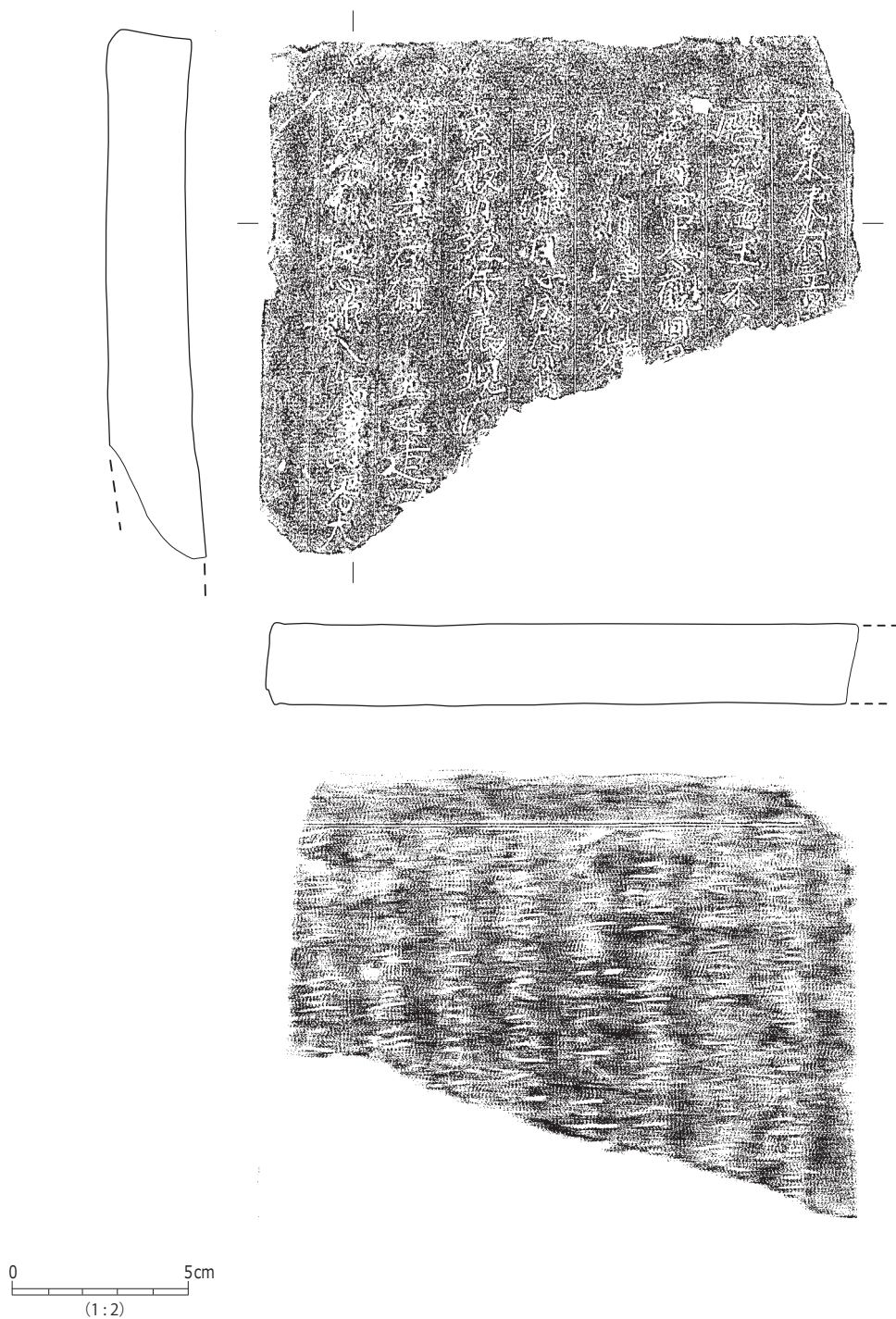


第9図 5786-4 (悉曇)



第10図 5786-5 (悉曇)

0 5cm  
(1:2)



第11図 5786-6 (溪嵐拾葉集)

H 若發懺悔心能入此金剛界大：

《Y面》

a 一切罪障皆得消滅獲得……………  
 b 大悲胎藏界曼羅是……………  
 c 十二地一切菩薩所出……………  
 d 身中有本來不生……………  
 e 目◆時如來蓮花……………  
 f 知自身中有成□……………  
 g 成佛成佛果時……………  
 h 四尊生八葉上……………

これは大正大藏經第七十六卷に所収されている『溪風拾葉集』（以下『溪嵐集』と略記）の卷五十五「胎藏界曼荼羅 池上作」末尾（「胎藏界」および卷五十九「結願作法」の一部から成っているようなのだが、その書写規則が一般的な瓦経に比べて著しく異なっていることから、その詳細について確認しておきたい。

まず、X面とした側の内容を大正大藏經所載『溪嵐集』から引用すると【資料①】となり、追加や大幅な脱字があるものの、概ね合致することから、X面全体は『溪嵐集』卷五五の末尾に相当する箇所であることがわかる。

さらに、a行は日行から連続しているので、この瓦経の表裏は、X↓Yと理解してよさそうである。しかし、大正大藏經ではb行以降からの文字が続かず、瓦経の書写内容が別の箇所から引かれていることがわかる。

そこで、次にY面の残存文字から照合すると、こちらは同じ卷五十五に

載る【資料②】～【資料④】の各部分とみなされた。

問題はその連続性である。大正大藏經では、資料②が資料③より前出するにもかかわらず、瓦経上では資料③の後段（g～h行）に現れ、資料③は本来続かないはずの資料①の直後に書写されている。さらに、d行で書写されている箇所は、やや適合度は低いものの、資料④が相当するとみられる。また、e行に見られる内容は『溪嵐集』卷五十九（資料⑤）に適合するらしい。以上の前後関係を整理してみると、

〈瓦経での書写順〉

資料①↓資料③↓資料⑤↓資料④↓資料②

〈大正大藏經での出現順〉

資料④↓資料②↓資料③↓資料①∨∨資料⑤

となる。

このように、X面はY面に比べてまだ連続性が保持されていたものの、両面あわせた瓦経全体の構成で捉えた場合、当資料は明らかに書写文言が文節化して相前後する、きわめて異質な類例であるといつてよい。ちなみに、残存する文字の配置状況からは一行あたり一九字前後と見られ、原形法量は幅三一五mm、高さ二六八mmと復原される（一五行として算出）。これは他の瓦経群よりも大型で、どちらかと言えば小町塚瓦経の法量に近くなるが、書写内容の連続性を他の既出資料と比較・追及できないため、配置復原案の提示などは控えざるを得ない。

そこで試みに、当瓦経の特徴として上述した刻字様態に再度着目し、これに近い筆致をもつ瓦経資料を探索した結果、早稲田大学図書館所蔵の拓本二点<sup>(14)</sup>（写真13・14。以下、早稲田拓本と略称）にあたることのできた。両拓本には付属情報として「伊勢市浦口町且過山出土」とあり、小町塚瓦

経であると考えられている。拓本からは、いずれの原品も二つの破片を接合したもので、上辺及び左右の小口面を残していることなどが見て取れる。それぞれの翻刻を以下に示す。

《X面》		《Y面》	
1	以如是等求請之 <input type="checkbox"/> <small>(句カ)</small>	1	法然後成就
2	種重 <input type="checkbox"/> <small>(説カ(亦カ))</small> ◆無所 <input type="checkbox"/> <small>(劫カ)</small>	2	(空白)
3	尾羅花散其物	3	蘓悉地羯羅
4	尾羅花或用		
5	顯光用塗香塗		
6	◆應知如是		
7	真言持 ◆香		
8	而 ◆果已如		
9	◆速得成就		
10	速得成就於其		
11	◆其物增多及 <small>(者カ)</small>		
12	此名一切成就秘 <input type="checkbox"/> <small>(密カ)</small>		
13	是光顯之法餘		
14	・ <input type="checkbox"/> 欲作成就 <input type="checkbox"/>		
15	(空白)		
	〈欄外〉 ◆卷		

(空白)	
4	承安四年 <small>子甲</small>
5	同心願主 ◆
6	沙彌觀西 ◆
7	字教音僧寬 <small>カ</small>
8	新五入道字瀧
9	字常光入道僧
10	字三印僧中樂
11	僧永真 ◆千林
12	僧定舜字熊 <input type="checkbox"/> <small>(王カ)</small>
13	源 ◆犬子佐伯五郎
14	佐伯四郎同五郎同
15	

この内容を大正大藏経で照合した結果、蘇悉地経(別本二)巻下「光物品第三十四」の最末尾に相当した<sup>15)</sup>。両拓本の書写内容は連続しており、二枚の拓本はそれぞれ原品瓦経の表裏から採拓されたものとみられ、〇〇〇二と枝番が付けられている画像が表面で、〇〇〇一が裏面にあたる。両者は一見すると、表面が一四行、裏面は一五行と異なるように見えるが、表面の最終行から欄外にかけて空白行があったようなので、同じ行数とみてよいだろう。さらに裏面の三行目以降は經典上経文がない部分であり、かつ人名を羅列することから、その内容は奥書と思われる。なお、画像上で計測したところ、瓦経の幅は約三〇〇mm(野線の幅は一九mm)、高さ(一行一七字として復原)が三二三mmとなり、当拓本の原品は既知の小町塚瓦経よりもやや大型だった可能性がある。

早稲田拓本に着目した理由は、上述のように筆致の類似性に加え、書写

内容途中から文字の様相が変化する点にもある（杵線内）。拓本資料ということで原品が確認できないため改竄されている可能性も否定できないが、少なくとも拓本を見る限りでは二種類の筆致が同一破片上に存在していることは間違いない。篋書きによる刻字であること、字画の抜き部に弱い粘土粒のメクレが残ることが特徴の筆致A（他の小町塚瓦経にも見える）と、瘦せた細い線で硬質な運筆の筆致B（杵線内、当館資料考五七八六―八に類似）としたとき、一枚中での出現順は、A↓B↓A↓Bとなり、奥書願文だけでなく経典部分でも筆致Bが見られることは特筆される。

当初筆者は当館資料の刻字が他の瓦経と異なることから、そしてさらにその内容が経典以外に拠るものであるとわかったことから、瓦経盛行期（一二世紀末―一二世紀後半）とはまったくかけ離れた、後代の所産ではないかと懸念した。現在もそれを完全に払拭することはできないが、しかし早稲田拓本の存在から、筆致の問題をもって当資料を既存瓦経と何の関連性もない孤立した資料として捨象することはできないと考えるに到った。製作技法上の痕跡に経典書写瓦経と大きな齟齬はないこともその証左となり得るかもしれない。最後に、製作時期の問題について判断するにあたり、書写された史料の成立について検討しておこう。

#### 四、『溪嵐集』から想定される瓦経の製作時期

前節でみたように、当館資料考五七八六―八に書写されていた内容は、大正大藏経に所収される『溪嵐集』巻五十五「胎藏界曼荼羅 池上作」末尾および巻五十九「結願作法」の一部分に該当した。当瓦経の年代観を検討するために、書写された書物について、先行研究ならびに大正大藏経を

もとに考えてみよう。

まず、先行研究から『溪嵐集』に関する要点を抜き出してみると、作者である光宗は建治二年（一二七六）に生まれ、観応元年（一三五〇）に七十五歳で没したという。道光上人とも称され、天台の「記家」（天台宗内において秘説口伝を記録する学僧）として活動した。その同輩でもあり師でもあった恵鎮とならんで黒谷流と称されたとも言われている。「望月一九六〇・三四四頁」。『溪嵐集』はその数が三〇〇巻とされてきたが、現在確認されているものは一一六巻を数えるという「野本二〇〇一」。内容は、「中世の比叡山とその周辺に行われた四分の記録（顕・密・戒・記）などの仏書・口伝書」「前掲書」を光宗がまとめたものであるが、中には「過去の文献をそっくり引用した巻も見られ」る「田中二〇〇三・六頁」。

大正大藏経所載の「胎藏界曼荼羅」には「三部経大意」の首題がつき、内容は大日経・金剛頂経・蘇悉地経のいわゆる秘密三経（大日三経）に關しての記述である。そして「已上池上御作 以穴太御本書了／天台沙門光宗記之」との識語が記されている（資料①）。「胎藏界曼荼羅」という名称の書物について詳細は得られなかったが、その作者「池上」は、池上阿闍梨とも称された皇慶（九七七―一〇四九）のことであるとみられる<sup>16</sup>。「穴太本」とはおそらく台密十三流のひとつである穴太流伝本の謂であろう。田中貴子によれば、光宗の学統は、興円の門下であると同時に、多くの流派にその名を連ねていることがわかっていく。それは、光宗が「記家という性格上、他の流派の口伝に通じている必要があった」ためとされている。梨本流・穴太流・葉上流・法曼流などの血脈に名前があがるのが引証されている「田中二〇〇三・一〇―一二頁」。そして、これら諸流が大きく谷流と称され、その祖が皇慶であることから「望月一九六〇・三四四―三

四四四頁」、皇慶の著作「胎藏界曼荼羅」が相伝され、そのひとつである「穴太」本を光宗が閲写したと、識語を読み解ける。

一方の巻五十九「結願作法」は修法に関する解釈や方式についてかかれただものである。文中には「本云文永五年冬比。於東塔西谷真乘□<sup>(マ)</sup>出写了」が見え、この数十行前の箇所が瓦経への書写部分となっている。文永五年(一二二八)は光宗はまだ生まれておらず、また「本云:」とあることから、これは書写された「原本」に明記されていた識語とみてよいだろう<sup>(17)</sup>。ただし、この識語の改行直後の「源惠之胎藏界啓白黒谷説:」とあるもの<sup>(18)</sup>、これ以後の内容において当史料の成立時期に関する情報は本巻奥書にある元禄十四年の実観(大正大藏経底本となった真如藏本の校合僧)による校勘が載るまで見当たらなくなる。このように本巻では、巻五十五とは異なり、光宗の名前が記される識語がなく、前掲識語以降の部分がいつ記録されたのかを特定する記載も見つけられなかった。そのため、この巻全体が光宗没後に別人の手によってなったものである可能性も浮上してくるが、そのことを明らかにする能力は筆者にはない。よって、ここでは、『溪嵐集』には光宗の識語をもたない巻が他にもある[田中二〇〇三、一〇六頁]ことをふまえ、ひとまず光宗が書写したものとみなしておく。その結果、この巻全体が、「原本」ならびに源惠説をふまえた光宗自身の見解をまとめたものとして捉えることができるだろう。そしてその成立年代は、正応五年(一二二二)頃から『溪嵐集』執筆の期間であったと考えられる。

以上のように、瓦経に書写された箇所は、『溪嵐集』成立までにそれぞれ別の書物として存在していた内容の引き写しであることはおそらく間違いない。したがって、当瓦経の年代観(製作時期)を推定するためには、

瓦経への書写が『溪嵐集』を用いたのか、あるいは原本を用いたのかを明らかにしなければならない。しかしこの点に答えることはきわめて困難である。よって、現在のところ、両史料が一枚の瓦経の両面に書写された(すなわち同時に閲覧できた)ということを中心し、最も素朴な理解となる、『溪嵐集』の成立をもって上限とするほかはない。『溪嵐集』の成立が一二二一年〜一三四七年頃と目されていることから「野本二〇〇一」、当瓦経の製作時期は概ね一四世紀後半と判断できよう。これはいまままでに知られている経典書写瓦経の年代観(一一世紀末〜一二世紀後半)とは大きく異なる。この年代の相異が、一般的な瓦経製作の年代幅を広げることにつながるのか、あるいは当瓦経の特殊性として処置されるのかは、今後の類例を俟たねばならないだろう。

## 五、まとめ

以上、大阪歴史博物館が所蔵する下郷コレクションの瓦経について、その内容を紹介しつつ検討を行った。最後にその成果をまとめておく。

- (一) 法華経 卷八「陀羅尼品第二十六」  
(所蔵番号…考五七八六一〇)
- (二) 大日経 卷五「入秘密漫荼羅位品第十三」から「秘密八印品第十四」  
(所蔵番号…考五七八六一九)
- (三) 金剛頂経 卷下 (所蔵番号…考五七八六一八)
- (四) 蘇悉地経 ①卷上「分別同伴品第四」から「擇處品第五」  
(所蔵番号…考五七八六一三)

## ② 卷上「持真言法品第六」

(所蔵番号…考五七八六一七)

## ③ 卷中「補闕少法品第十五」

(所蔵番号…考五七八六一二)

## ④ 卷下「供養品第二十」

(所蔵番号…考五七八六一二)

(五) 悉曇瓦経 (所蔵番号…考五七八六一・四・五)

(六) 『溪風集』 (所蔵番号…考五七八六一六)

このうち、考五七八六一二において、これまでに知られていた拓本資料によって脱漏部分が補えることが明らかになった点は注目される。こうした補完関係のあり方は、これまで指摘されてきた「作善」としての瓦経の位置づけをより具体的に浮かび上がらせたといえる。経典そのものを完全な形で保存していくという思想が背景にあるならば、こうした、いわば不完全な個体は修整または取り除かれるべきものである。それに対して、作善業という意味がより強く作用していたならば、経典の整合性に対する意識はやや低くなるため、後補によって辻褃を合わせるといふ姿勢として現れても不思議ではない。今回確認できた資料は、まさにそうした瓦経製作の片鱗を覗わせるものとして評価できるのではないだろうか。

他方、考五七八六一六において経文以外の書写内容が確認されたことも大きな発見であった。正直、現在の定義からすればこれを瓦経と呼ぶことには躊躇するものの、その性格が明らかになるまでは便宜的に瓦経の範疇に含めておくしかないと考え本稿ではそのまま呼称してきた。今後こうした経典以外の瓦経の類例が増えていけば、その性格がより明確になり、適

切な名称も与えることができるようになる。そして、そもそもなぜ『溪風集』が書写原典として採用されたのかという本質的な疑問についての検討が可能になり、さらに瓦経製作がどのように展開・推移したかを明らかにすることにも繋がるだろう。

そのためにも先学諸氏の功績を発展的に継承し、各地に残る瓦経資料の掘り起し作業が求められる。これは瓦経研究を深化させると同時に、伝世瓦経の来歴を探る上でも重要な情報となる。当館所蔵品についても、今後、連続する破片資料の出現が俟たれる。

【謝辞】 本稿を執筆するにあたり、国立歴史民俗博物館の村木二郎氏にご指導・ご教示を賜った。末筆ではありますが、氏の学恩に深謝申し上げます。

## 【註】

- (1) このほかに山根徳太郎旧蔵拓本資料一・二点が存在する。
- (2) このうち、考六二五九と考六二六一一について、これらを報告した網干善教は気になる記述をしている。まず、考六二五九であるが、これは五字一句の偈文、経名・首題名・巻次数、僧名、年月日（治承二年□月十五日）を、それぞれ縦四段、横一七行の罫線区画内に配置するという変わった瓦経である。網干は、その大きさ（縦約三三〇mm、横約三三〇mm）が異例の大きさであることや、付帯する伝来出土情報（備中浅原山朝原寺）を「安養寺経塚」と見做す一方、その様相が他の安養寺瓦経と著しく異なることを指摘する。なお、近年数中五百樹が類例を紹介（こちらは年紀が「治承二年七月一日」となっている）している「数中二〇一三」。次に考六二六〇については、そもそも「全六百巻もある『大般若波羅蜜多経』の全体を書写したのだろうか」という疑問

- を呈した「網千一九八六、二九六頁」。また、同資料に付帯する出土地情報に「福岡県飯盛山経塚」とあるにもかかわらず、飯盛山瓦経群には『大般若波羅蜜多経』が含まれていないことなども指摘する「同前、二九七頁」。これらが、当資料の存在自体を懐疑的に捉えているのか、あるいは出土地情報のみ否定なのか、網千の真意は測りかねるが、いずれにしても両者についてはいったん即断を避け、さらなる検討を要する資料であるとみて間違いない。
- (3) 判読内容の翻刻にあたっては書写されている漢字を使うよう心がけたが、異体字や崩れも多いため必ずしも同一内容とはなっていない。なお翻刻で使用した記号は以下のとおりとする。すなわち、「・・・」欠損しているものの文字（または行）がある程度存在することがほぼ間違いない部分、◆…文字と認識できるが判読不能、□…欠損のため判読不能を示す。
- (4) 校合は、SAT大正新脩大藏経テキストデータベース二〇二二版 (<http://21d.zkl.u-tokyo.ac.jp/SAT/>) を主に用い、あわせて文字の異同や補注を「高楠一九二八」により確認した。特に異体字を対校することは避け、誤字の指摘とした。なお、法華経は大正大藏経の巻構成ではなく八巻構成を採用し、各巻の構成は岩波文庫版「坂本ほか一九六二」に拠った。
- (5) 一七字×一五行で復原、ゴシック体は瓦経書写部分を示す。なお配置案での付加記号は以下のとおりとする。○…瓦経での誤字、●…瓦経での脱字、○…瓦経での追加字、○…瓦経において文字と認識できるが判読不能だったもの、□…瓦経において欠損のため判読不能だったもの、傍波線は字順の乱れや重複など。
- (6) 枚数の計算は、既存資料の丁付をふまえ、經典各巻ごととした。ただしその方法は、テキストデータの各行から文字数を導き、それを上述規格で割るという機械的な算出であるため、あくまでも目安である。
- (7) 直前には一枚目（小町塚瓦経・個人所蔵品）が存在するとされ、連続する旨のご教示を報告者である村木氏より得た。
- (8) 仔細に見た場合、以下の点は注意を要する。まず、X面九行目「晝」とした文字は高麗本と同じである。さらにY面三行目にある「尿」と読んだ文字では高麗本ではよく似た文字「屎」が重ねて記されているのに対し、別本二では「屎。穢…」となっており、この「屎」の誤写であると考えられる。より高麗本の方が書写内容に近い印象を与える。今後高麗本での確実な校合例が増えた場合、当資料も浮上してくる可能性を残しておきたい。
- (9) 「村木二〇〇二」に44として紹介されている国立歴史民俗博物館所蔵瓦経拓本（配置案点線囲内の傍波部分）とその復原案がこれに相当する。この復原案のうち一点の原品が網千により報告された関西大学所蔵瓦経（同囲み内の前半ゴシック体部分）であり「網千一九七八」、さらに東京国立博物館所蔵瓦経（同後半部分）がこれと同一個体（別箇所）である。
- (10) 「村木二〇〇二」での配置復原では、片面瓦経の行数は一〇行と仮定されているが、当館瓦経との関係が正しければ、一二行で復原されるものと思われる。こちらが一五枚目になるとみなした。
- (11) 小町塚瓦経のなかに複数の蘇悉地経巻下があることが指摘されている「村木二〇〇二、七二～七三頁」。
- (12) 京都国立博物館のものは悉曇と同一面の上部欄外に刻まれていて様相をやや異にする。したがって、ここでは二つの解釈がありえる。ひとつは、考五七八六―五の場合には経文の一部であるとみなす立場で、もうひとつは、これらの刻字をいずれも丁付とみなす立場である。前者の場合、この文言が出てくる主な經典として『大般若波羅蜜多経』の名があがることは興味深い。また、後者の場合、これまで知られている丁付をみても刻字位置が一定とは限らないため、可能性はかなり高いだろう。さらに、仮に後者だとすると、同一經典内（さらには同一巻次）での枚数という理解となるが、しかし、「百八十」という表現と枚数は、今まで見た法華経や大日経にはあてはまらず、それほど大部の經典を選ぶとすればやはり『大般若波羅蜜多経』が候補としてあがってくる。どちらにしても推論の域を出ないが、これらの類例が今後

新たに発見された場合の参考に付言しておきたい。

- (14) 『早稲田大学図書館古典籍総合データベース』(WEB版: <http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/about.html>) による(請求記号:イ〇四〇三二五三B一四六、タイトル:伊勢市浦口町旦過山出土瓦経)。この拓本は史学者・荻野三七彦(一九〇四～一九九二)の旧蔵資料で、荻野は神宮司庁の嘱託となっていたことから「日本歴史学会編一九九九、八二～八三頁」、その際に入手したものかと推察される。

- (15) この結果、国立歴史民俗博物館所蔵の宇野拓本二一九(「村木二〇〇二」の51)と同一個体(別箇所)ではないかと考えられる。

- (16) 大正大蔵経『溪嵐集』卷四十三「聖天祕決 私苗」には、「一。池上遺言事或東寺眞言師云。谷阿闍梨遺言云。(後略)」とあり、「池上」が谷阿闍梨とも呼ばれた皇慶を指していることがわかる。「大正大蔵経、六四二頁」。

- (17) なお、「東塔西谷」は延暦寺東塔の西谷であろう。「景山一九六六」。「真乗□」は不明で、真乗院とすべきかも知れないが、詳細については知りえなかった。「前掲書、二二五頁」。

- (18) この「源恵」は第九七世天台座主・源恵(生没年不詳、補任は正応五年(一二二二))。以上『天台座主記』による。)とみられる。

#### 【参考文献】

- 網干善教 一九七八「関西大学考古学資料「瓦経」片の復原―2―」『史泉』五二  
 関西大学史学・地理学会、一～一五頁
- 同 一九七九「「瓦経」資料解説」『考古学論攷(檀原考古学研究所紀要)』第三冊 奈良県立檀原考古学研究所、一～三三頁
- 同 一九八六「大阪長尾コレクションの瓦経について―「治承二年」在銘瓦経を中心に」『関西大学文学論集』三六 関西大学人文科学研究所、二八七～

三〇六頁

- 石田茂作 一九五八「瓦経の研究」『瀬戸内考古』二二一(のち、『佛教考古学論攷』三 経典編 一九七七 に採録)

景山春樹 一九六六『比叡山』角川新書 角川書店

鎌木義昌編 一九六三『安養寺瓦経の研究』安養寺瓦経の研究刊行委員会

小玉道明 二〇一二『統考古の社会史―伊賀・伊勢・志摩・東紀州考古記録―』

光出版印刷株式会社

坂本幸男・岩本裕 訳註 一九六二『法華経』(上)～(下) (岩波文庫青三〇四―

一～三) 岩波書店

高楠順次郎 一九八九『大正新脩大蔵経』(普及版) 大正新脩大蔵経刊行会

田中貴子 二〇〇三『溪嵐拾葉集』の世界』名古屋大学出版会

難波田徹 一九八一「瓦経の規格性―大日寺と小町塚の瓦経を例として」『MUS

EUM(東京国立博物館研究誌)』、東京国立博物館、四〇―一頁

難波田徹 一九八二「富岡謙蔵氏蒐集・富岡益太郎氏寄贈瓦経十七片(本館蔵)

について―小町塚瓦経―」『学叢』四 京都国立博物館、一二五～一四二頁

日本歴史学会編 一九九九『日本史研究者辞典』吉川弘文館

野本覚成 二〇〇一「溪嵐拾葉集」『日本仏教の文献ガイド』日本の仏教第Ⅱ期・

第三卷(大久保良峻ほか編) 日本仏教研究会 法蔵館、四七～五〇頁

村木二郎 二〇〇二「作善業としての瓦経―伊勢小町塚・菩提山瓦経の復原から」

『国立歴史民俗博物館研究報告』九三 国立歴史民俗博物館、一～八四頁

望月信亨 一九六〇『望月仏教大辞典』第四卷(第三版) 世界聖典刊行協会

和田年弥 一九九〇「伊勢小町塚瓦経の復原研究―新資料の拓本帖を中心にして―」

『國學院雑誌』第九一卷九号 國學院大學、二二六～四〇頁

和田実編 二〇〇〇『東観音寺展』豊橋市美術博物館

藪中五百樹 二〇一三「治承二年在銘瓦経の検討」『立命館大学考古学論集Ⅵ』和

田晴吾先生定年退職記念論集、四三三～四三七頁

【資料①】大正大藏經 第七十六卷 六八七頁中段二七行目〜末尾

※瓦經のA～a行に相当

.....

菩提心ヲ名金剛界。又一切有情ノ身中ニ本來有普賢大菩提心。爲貪嗔癡惑之所纏縛。經歷六趣四生不觀自心成佛之理。是故

大日如來經ヲ無數劫爲上根之人說金剛

界大法。於内心中今觀日月輪瀉妄霧。於

惠風見大日ノ光。澄迷濁於定泉ニ顯得本

覺。若有行人如法修行。觀法成就スレハ即身成

佛。自心大日尊三十七尊圍繞。密嚴國土。無

盡莊嚴。内證眷屬現在。皆是觀心成佛。是

則金剛界無上乘教大意也。何況經云。若

有衆生已造四重五無間極重罪業。若發

懺悔心。能入此金剛界大曼荼羅。及有見

者。一切罪障皆得消滅。獲得一切如來眞

實智慧云云故今爲結縁於勝教ニ故。以不

堪之器恭敬受習金剛界念誦儀軌ヲ。於懈

怠身恐欲練行供養修行之勤。仰願大日如

來諸尊聖衆。殊垂證明常被加護。速離魔

縁身心精進善根相應成佛大事ヲ必令成

就給。願往生彌陀淨刹。聽聞此祕教。開悟

自心妙惠。以自心悟智慧。普示法界三寶ノ

境界。證知弟子意趣矣

已上池上御作 以穴太御本書寫了

天台沙門光宗記之

【資料②】同前 六八七頁上段 三〜六行目 ※瓦經のg・h行に相当

.....

胎藏祕密教法ヲ。若有行人如法觀行即身成佛果時八葉開敷。心王大目題蓮花臺上。四佛四尊生八葉上ニ。心數諸尊諸會具

.....

【資料③】同前 六八七頁中段 一四〜一九行目 ※瓦經のb・c行に相当

.....

傳受胎藏。大法修行三密勝行也。夫大悲

胎藏界曼荼羅者。是三世十方一切諸佛之

根源。四十二地一切菩薩之所出矣。何物名

胎藏界凡夫因時如未敷蓮花。爲諸惑之

.....

【資料④】同前 六八四頁上段 二一〜二三行目 ※瓦經のe・f行に相当

.....

胎藏界ト。凡夫因時ニ如未敷蓮花爲諸惑所

纏縛輪迴生死ニ不知身中有佛性理。是以

.....

【資料⑤】同前 六九九頁中段 二三行目 ※瓦經のd行に相当

.....

身中。有本來不生不滅之理界。如最下卑

.....

(写真はすべて縮尺1/2)



写真1 考5786-10 (法華経)



写真2 考5786-9 (大日経)



写真3 考5786-8 (金剛頂經)

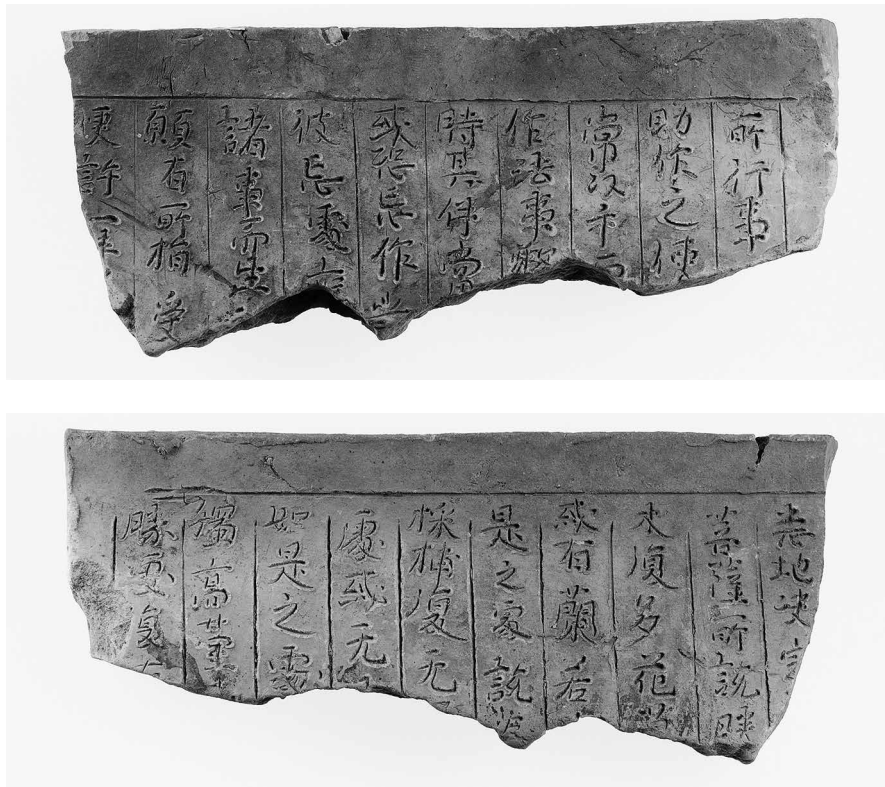


写真4 考5786-3 (蘇悉地經・別本二)



写真5 考5786-7 (蘇悉地経・別本二)



写真6 考5786-2 (蘇悉地経・別本二)



写真7 考5786-2 (蘇悉地經・別本二)

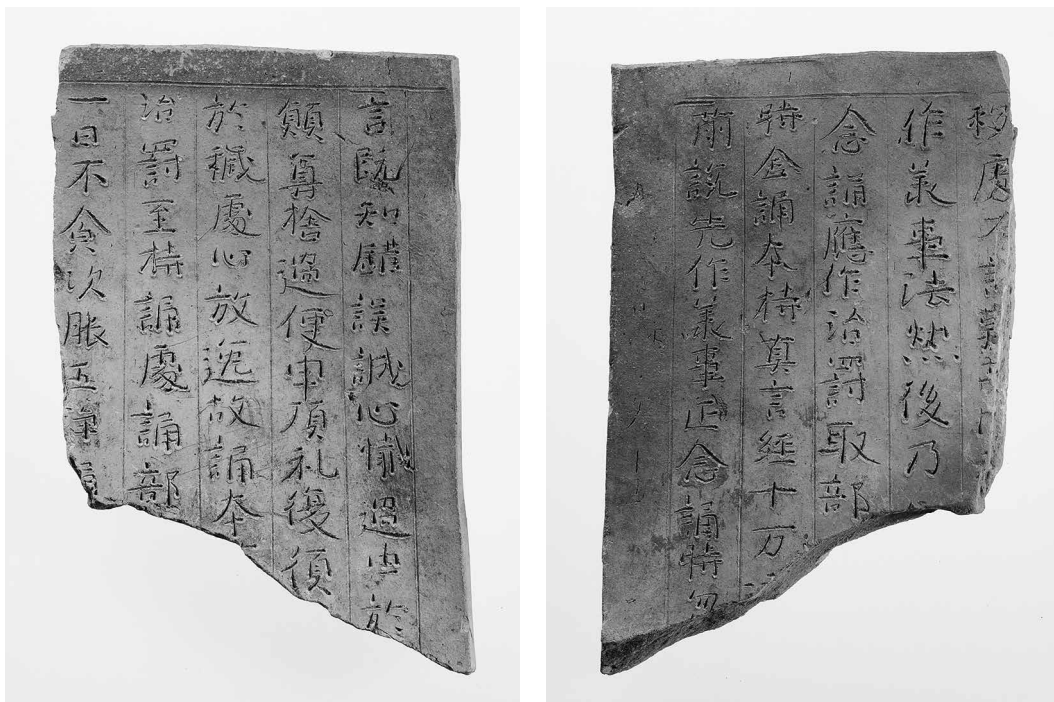


写真8 考5786-11 (蘇悉地經・別本二)



写真9 考5786-1 (悉曇)



写真10 考5786-4 (悉曇)



写真11 考5786-5 (悉曇)

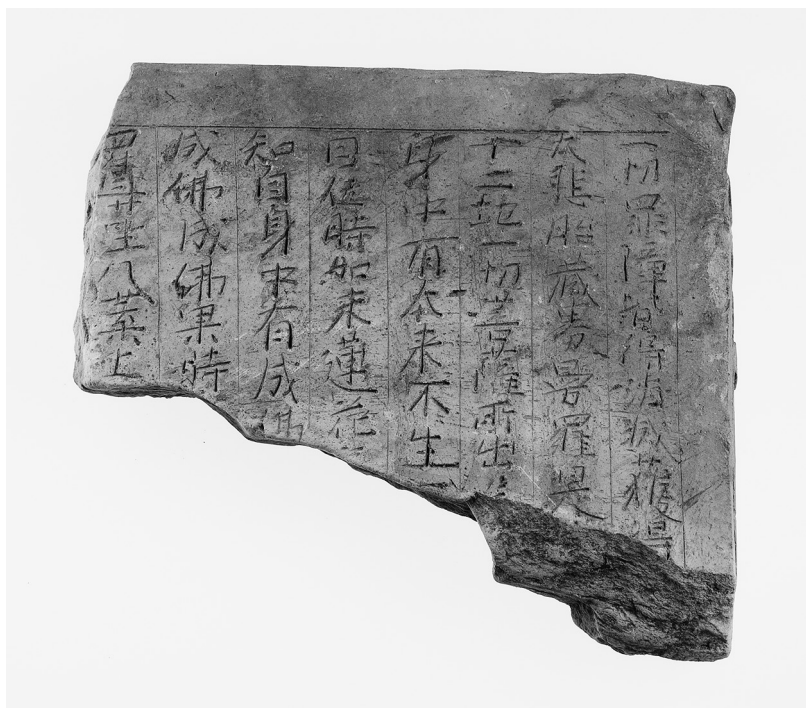
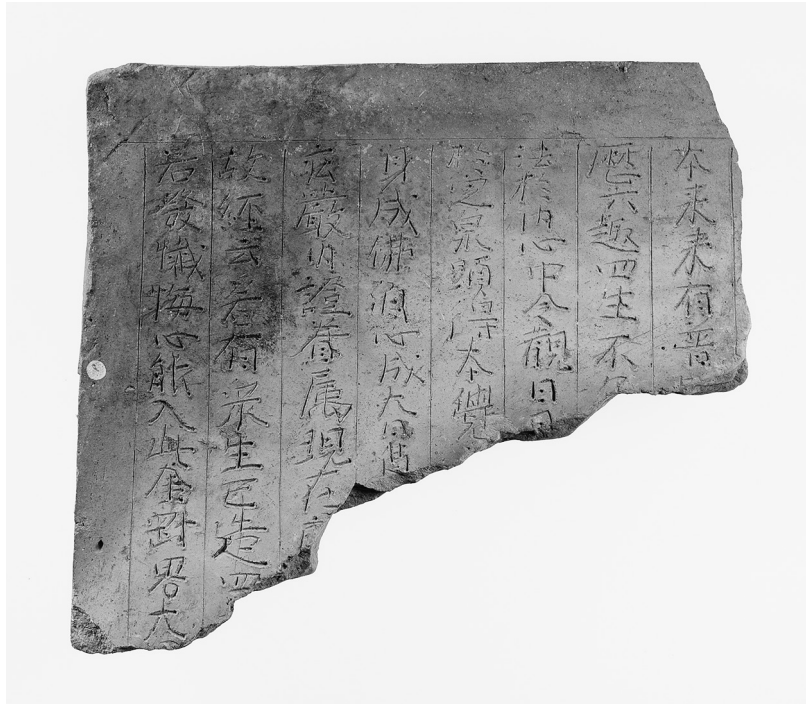


写真12 考5786- 6 (溪嵐拾葉集)

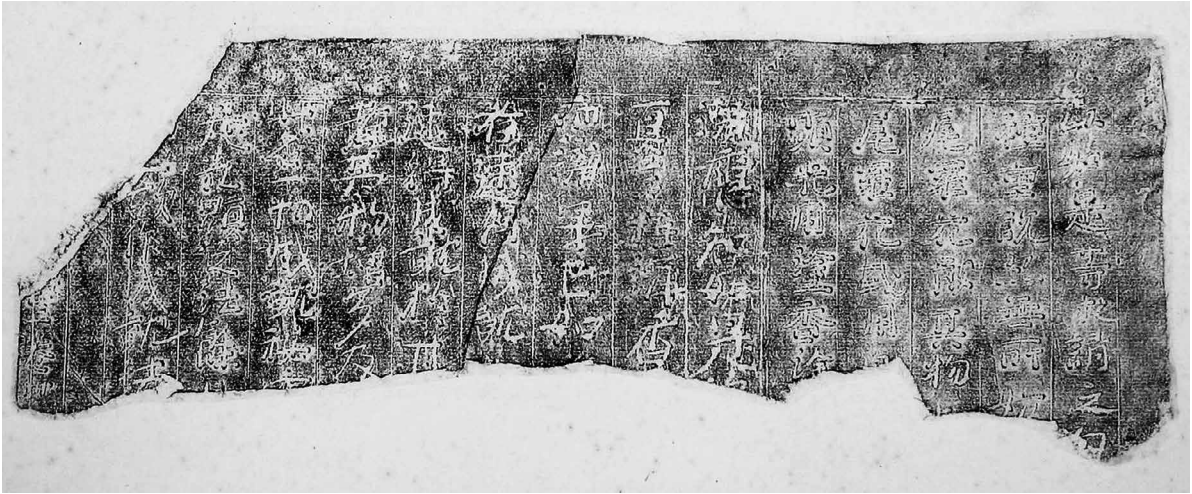


写真13 早稲田大学図書館所蔵拓本：イ04 03153 B146-0002  
(蘇悉地経・別本二 卷下)

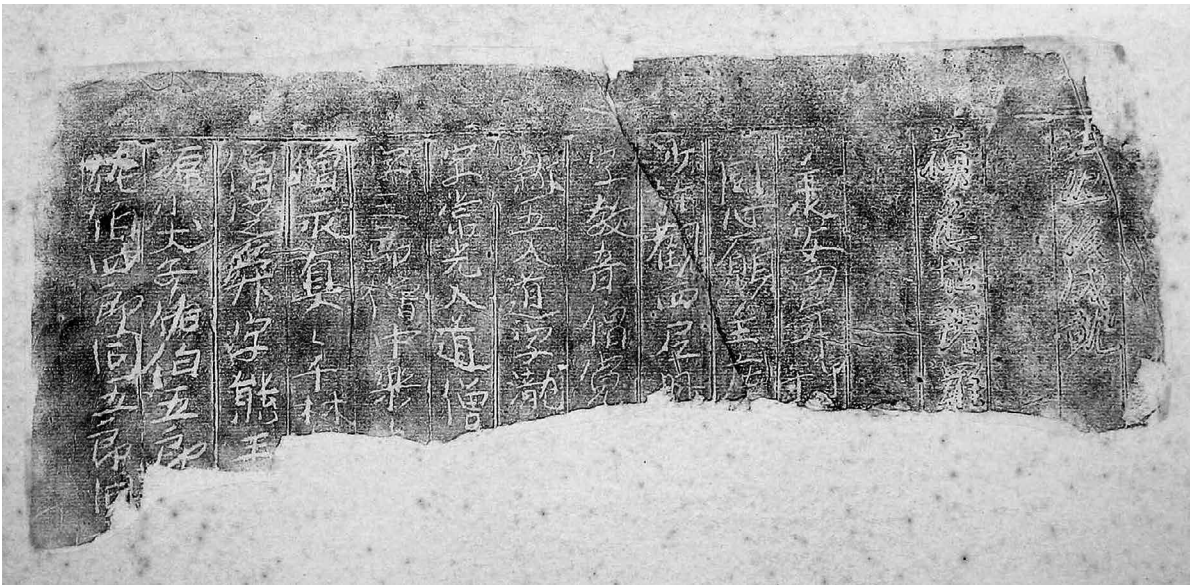


写真14 早稲田大学図書館所蔵拓本：イ04 03153 B146-0001  
(蘇悉地経・別本二 卷下)

## Pieces of Gakyo (Buddhist scriptures on clay tablets) in the SHIMOGO Collection at Osaka Museum of History

KATO Shungo

The Osaka Museum of History possessed SHIMOGO collection. This collection was possessed by SHIMOGO mutual aid meeting Foundation which was ever located in Nagahama City, Shiga. There was not the researcher who mentioned Gakyo (sutra-inscribed tablets) included in this collection until now. This is because these discovery places are unidentified and it has not been announced so far. This report examined collation and the contents in order to report these Gakyo as a new example.

As a result, I understood that these were Komachizuka Gakyo in Ise City and a series of things. One in these had contents supplemented by the Gakyo which had been already found. This material is interesting in elucidating the production of Gakyo. Furthermore, Gakyo that the content except the sacred book was written was found. The contents are equal with a part of "*Keiranshuyoushu*" (『溪嵐拾葉集』) by Buddhist priest, Kosho (光宗; 1276-1350) of the Tendai sect. I attract attention as a problem left unfinished in the future how I should estimate Gakyo having the contents except the sacred book.

